



Jugend Philharmoniker

The 2nd Concert

ユーゲント・フィルハーモニカー
第2回定期演奏会

ごあいさつ

本日は、ユーゲント・フィルハーモニカー第2回定期演奏会にお越し頂き、誠にありがとうございます。

当団は2006年の発足以来、理念に掲げる「社会にオーケストラがどのように貢献していけるか」のもと、幅広い活動を行って参りましたが、この度第2回の演奏会を開催する運びとなりました。田中先生のご指導のもと、「音楽」を通じて偶然にもめぐり逢えたメンバー達と練習を重ねるごとに、ユーゲント・フィルハーモニカーの音楽としてまとまってゆく手ごたえを感じております。本日の演奏会では、私達の結束力と当団独特のサウンドを楽しんで頂けると幸いです。

最後になりましたが、ユーゲント・フィルハーモニカーの運営にあたってお力添え頂いた全ての皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



PROGRAM

ベートーヴェン (1770-1827)

Ludwig van Beethoven

劇音楽《エグmont》序曲 Op.84

“Egmont”, Op. 84 Overture

ワーグナー (1813-1883)

Wilhelm Richard Wagner

歌劇《リエンツィ》序曲

“Rienzi”, Overture

~~~~~ 休憩 ~~~~~

**ドヴォルザーク** (1841-1904)

Antonín Leopold Dvořák

**交響曲第9番 ホ短調 Op.95 《新世界より》**

Symphony No.9 “From the New World” in E Minor, Op.95

I. Adagio - Allegro molto

II. Largo

III. Scherzo (Molto vivace)

IV. Allegro con fuoco

## 指揮者紹介



田中 一嘉

Kazuyoshi Tanaka/Conductor

東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業。指揮を故斉藤秀雄、小沢征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。コントラバスを江口朝彦、堤俊作の両氏に師事。在学中より同大オーケストラ定期演奏会、オペラ公演等を指揮する。また、日本オペラ協会、長門美保歌劇団副指揮者、東京アカデミー合唱団の指揮者として、数多くのオペラ、合唱曲、特に宗教音楽分野での実績を積む。1976年、第4回民音指揮者コンクールに入選、奨励賞受賞。桐朋学園大学卒業後は、東京交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、九州交響楽団、札幌交響楽団等、大阪フィルハーモニー交響楽団、群馬交響楽団、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉、アンサンブル金沢など日本の主要オーケストラを指揮する。また、1992年には、ヤナーチェク春の国際音楽祭にてヨーロッパデビュー。1995年にはカルロビ・ヴァリ交響楽団を指揮するなど、その活動は多岐に及んでいる。昭和音楽大学講師。

## 楽団紹介

### ユーゲント・フィルハーモニカー

Jugend Philharmoniker/Orchestra



Jugend Philharmoniker (ユーゲント・フィルハーモニカー) は、財団法人「日本青年館」の音楽行事（オーケストラ・フェスタ、全国高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユング・オーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設されたオーケストラである。

選抜オーケストラが母体となっているため、実に様々な大学・高校オーケストラ出身のメンバーが揃っている。現在団員80名を越えるオーケストラまで成長し、2007年3月に第1回定期演奏会を文京シビックホールにて行った。また、動物園や各種催し物での依頼演奏など幅広い活動も行ってきた。

まだ生まれたての「赤ん坊」のようなオーケストラだが、音楽的に人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュアオーケストラだからこそできること（≡プロオーケストラには出来ないこと）」を追求することを理念としている。

L.v.ベートーヴェン(1770-1827)

### 劇音楽《エグモント》序曲 Op.84

聴け！聴け！

おお、いくたびこの響きに駆られて私は戦いの地

勝利の場へと自由の歩を進めたであろう！

いざ私もこの地下牢を出て栄光ある死へと進まん

自由のために死ぬのだ

今こそ私は悦んで自由のためにこの身を捧げん

劇音楽《エグモント》は、史実を基にしてゲーテが書いた戯曲に、この文豪を尊敬していたベートーヴェンが委嘱を受けて音楽をつけたものである。物語は、スペイン王フェリペ2世の圧制に苦しむ民衆を救わんとしたフランドルの貴族エグモント伯爵が王に捕らえられ、その愛人クレールヘンは毒を仰ぐが、彼女の魂が自由の女神となって獄中のエグモントの前に現れ、英雄の死が無駄には終わらないことを祝福する、というものである。このような題材はベートーヴェンにとって大きな意味を持つ。それは「束縛からの解放」「正義の遂行」という、彼にとっての絶対的なモットーを表現しうる手掛かりとなるからだ。

今回演奏する序曲について哲学者アドルノは「(序曲という)単純化は結果として、荒削りのファンファーレとでもいうものに成り下げている」と言い、「葛藤なき凱歌」というレッテルを貼り付けた。しかし、このようなベートーヴェン一流の単純さ、断定的口調こそ、200年近くにわたってこの曲が愛され続け、演奏する価値あるものとされる一因となっているのではないだろうか。

(E.T.A)

R.ワーグナー(1813-1883)

### 歌劇《リエンツィ》序曲

歌劇《リエンツィ》は、ワーグナーが1840年に27歳という若さで完成させた初期のオペラで、彼のオペラ作曲家としての名声を一気に高めた出世作でもある。その巨大な編成と演奏時間の長さ故に、現在では演奏されることは少なくなっているが、後に生まれる有名なオペラ作品に繋がるような華やかさと美しさをもった隠れた名作である。今回演奏する序曲には、劇中に出てくる旋律が満遍なく引用されており、長大なオペラのエッセンスが凝縮されている。

冒頭では民衆の蜂起を呼びかけるトランペットが三度鳴らされ、続いて第五幕冒頭において歌われ、全曲の白眉とも言えるリエンツィの祈りの歌「全能の天よ、護りたまえ」が静かに紡がれる。そして、リエンツィの不安や貴族たちの敵意を象徴する不気味な「意志の動機」と対峙しながら、続々と集まる民衆を騒々しく表現する弦楽器の上で今度は管楽器が祈りの歌を力強く演奏する。対峙する両者の緊張感はどんどん高まり、再び蜂起を呼びかけるトランペットに導かれるように激しい行進曲へと突入していく。民衆の蜂起を鼓舞するリエンツィの叫び「精霊の騎士」や、彼の妹イレネと恋人アドリアーノの二重唱「慈悲への感謝の歌」などを主題に展開していきながら、最後は壮麗なコーダによって締めくくられる。

この歌劇の主人公リエンツィは14世紀ローマに実在した政治家である。平民出身の彼は民衆のために立ち上がり貴族たちと闘ったが、最後は民衆の反逆により殺されてしまう。民衆のために立ち上がった英雄の悲劇を描いているという点で、最初に演奏されるエグモント序曲と共通している部分が多い。両作品の色彩の違いを楽しんで頂ければと思う。

(taxi)

## 曲目紹介

---

### A.ドヴォルザーク(1841-1904) 交響曲第9番 ホ短調 Op.95《新世界より》

副題の「新世界」はアメリカを指す。ドヴォルザークが渡米してから初めて書いたのがこの交響曲で、おそらく彼自身の作品の中でも最も有名なものではないだろうか。

ドヴォルザークは1892年、51歳の時ニューヨーク・ナショナル音楽院の創設者ジャネット・サーバー女史に招かれ、彼の故郷のボヘミアを離れ渡米し、音楽院長を務めることになった。当時、既に彼はアメリカでも高名で、チェコの小さな村の肉屋兼旅館で生まれたという素朴な出自と、それゆえの移民の文化への親和性の点から彼に白羽の矢が立ったのである。

今とは比べ物にならないほど人種差別が激しかった中、珍しく人種差別のない進歩的な音楽院で彼は黒人の学生には特によく目をかけ、黒人霊歌や黒人以上に迫害されていたアメリカ原住民の実態とその音楽に強く惹かれていった。また、アメリカの大自然に接して受けたものや大都会ニューヨークのエネルギーは彼が初めて経験した感動であった。こうした「アメリカにおける経験と感情を表現するような交響曲を書く」ことを強く勧めたのはまたしてもサーバー女史であった。これに応じて1893年、第9番を書き上げた。しかしながら、この交響曲にはアメリカ的なものばかりではなく、アメリカに来たからこそ強く感じた望郷の念も織り交ぜられている。もしかしたらアメリカの人たちにボヘミア的なものを味わわせようと思っていたのかもしれない。

初演は1893年12月16日、アントン・サイドル指揮ニューヨーク・フィルハーモニックの演奏である。実際には前日に行われた公開リハーサルでの演奏が事実上の初演となった。この時、第2楽章が終わると満員の会場から割れんばかりの拍手が起こり、それに応じてドヴォルザークはボックス席から挨拶を返さねばならなかったという。

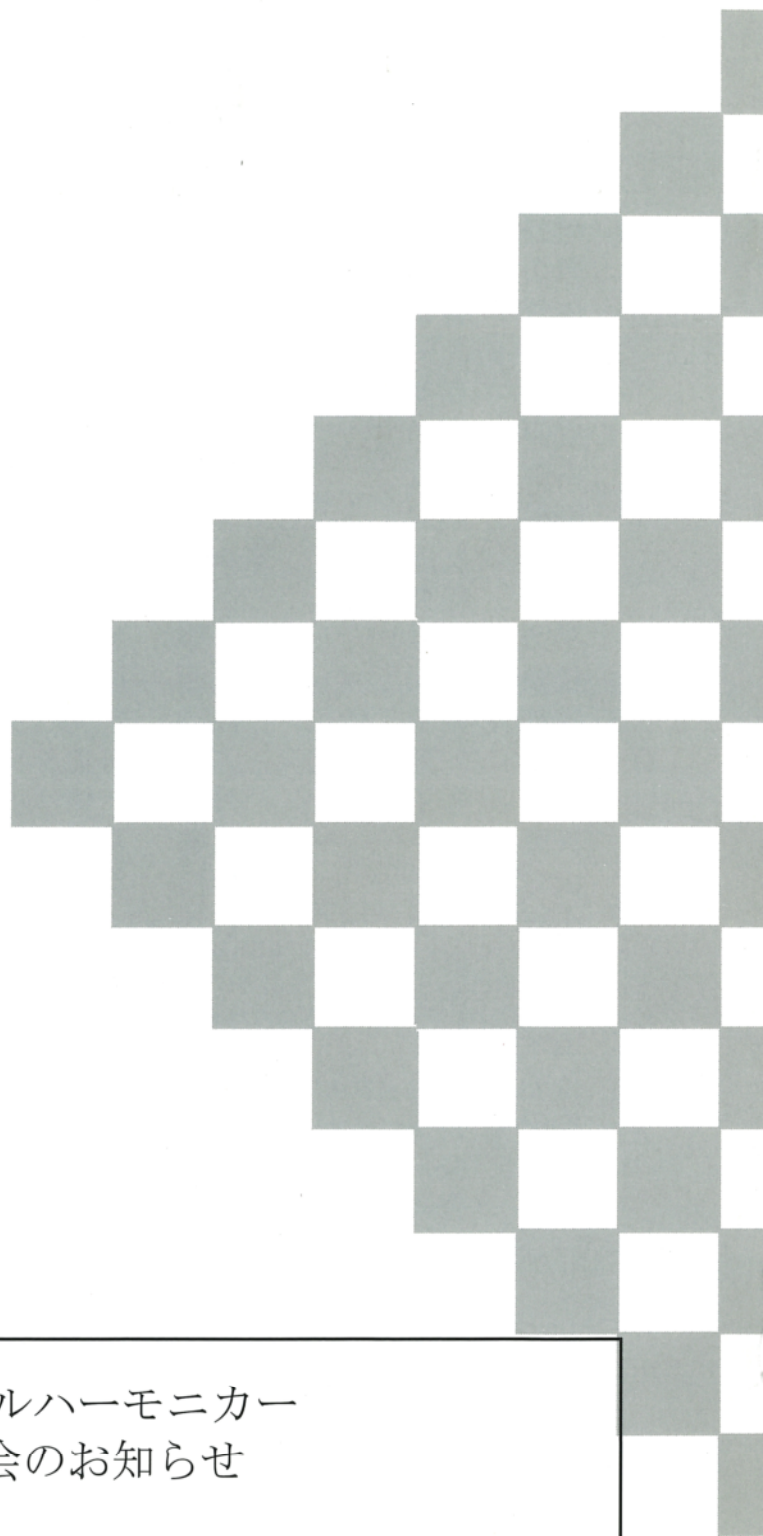
全体は4楽章編成である。激烈な表現の序奏を伴うソナタ形式の第1楽章、アメリカの詩人ロングフェロウの長編物語詩「ハイアワサの歌」の森の葬式の場面から暗示を受け、日本では「家路」という名で親しまれている郷愁のこもった旋律が有名な第2楽章、同じく「ハイアワサの歌」のインディアン達の婚礼の踊りからの靈感で作曲したというスケルツォの第3楽章、力強い序奏と主題が印象的な第4楽章となっている。全楽章で第1楽章の主題が再現され、第4楽章のコーダで第2楽章冒頭の管楽器によるコーラル風の和音が巧妙に生かされている点など、ドヴォルザークの創意が曲の隅々までいきわたっている。非常に興味深いのは第4楽章でフィナーレに向けてテンポが上がっていく部分で、最後の1音のフェルマータは管楽器のディミヌエンドで終えるという指示がある。指揮者のストコフスキーはこの部分を「新大陸に血のように赤い夕日が沈む」と評した。

ドヴォルザークがこの交響曲の至る所へ織り交ぜた、見知らぬ土地で感じた新鮮な感動とアメリカに来たからこそ感じることの出来た故郷チェコへの想いを感じて欲しい。

(ai)



Jugend Philharmoniker  
The 2nd Concert  
2008.3.22 (Sat.)  
at Ota Kumin Hall "Aprico"



ユーゲント・フィルハーモニカー  
第3回定期演奏会のお知らせ

2009年3月21日(土) 於 めぐるパーシモンホール

曲目未定

- ◇ 後日ご案内をお送りしますので、アンケート用紙にご連絡先をご記入下さい。
- ◇ お問い合わせ <http://timpani.minidns.net/jugend/> (当団Webサイト)